ぴかいち

人、物、技、場所などを選び出して紹介するコーナー「ぴかいち」

光に向かって

佐藤（さとう） 誠喜（せいき） さん（田尻地域）

佐藤誠喜（さとうせいき）さんは、社会福祉法人田尻福祉会が運営する「特別養護老人ホームかごぼうの里」で機能訓練指導員として働いています。

佐藤さんは、30歳の時に視力を失いました。つらい日々が続きましたが、何とか生きていかなければと、県立盲学校（現・県立視覚支援学校）に通い、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の資格を取得しました。

そして、盲学校在学中に、のちの希望となる陸上競技と出会いました。本格的な陸上競技は初めてでしたが、もともと負けん気の強い佐藤さんは、次第にのめり込んでいきました。

2001年に宮城県で開催された第1回全国障害者スポーツ大会の60㍍走とソフトボール投げへの出場を皮切りに、国内大会の100㍍走や200㍍走を中心に数多くのメダルを獲得してきました。

2005年からは、日本代表として国際大会に出場するようになり、2007年のブラジルと2011年のトルコの大会では、1600㍍リレーで銅メダルを獲得しました。

これまでパラリンピックへの出場は、惜しくも逃してきましたが、「負けても終わりじゃない。やめたら終わりだ。続けた先に光がある」と自らを鼓舞し、2016年のブラジル・リオデジャネイロで開催されるパラリンピックへの出場を目標に、東京の陸上クラブチーム「A.F.T.C」に所属し、ひたむきに練習を重ねています。「周りの協力があるからこそ陸上競技が続けられる」と、皆さんへの感謝の気持ちを欠かすことはありません。周りの人の愛情や人情など、視力を失ったことにより見えてきた全ての「心」を大事にしています。

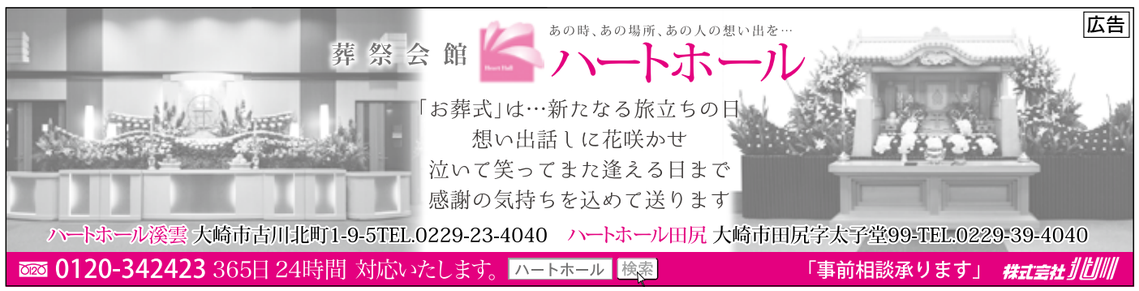
「2020年東京パラリンピックに、すべての障害者が関わりを持ち、社会参加のきっかけにしてほしい。また、大崎・宮城から多くの選手が参加できるよう各関係機関による支援と障害者スポーツへの市民皆さんのご協力と応援をお願いします」と笑顔で語る佐藤さん。未来をしっかりと見据えた挑戦は、これからも続いていきます。

①

②

③

④

⑤

①次回のパラリンピックには、「やり投げ」での出場も視野に入れながら、練習を積み重ねています
②日中は、入所者皆さんの機能訓練につとめます
③画面を読み上げるソフトを利用し、パソコンでの事務作業も行います
④練習パートナーの佐々木隆寿（ささらたかとし）さんからのアドバイス。選手とパートナーは、確かな信頼関係を築き上げていきます
⑤11月1～3日、長崎県で開催された全国大会では、100ｍ走で銀、200ｍ走で金メダルを獲得しました